

富

野 崎 氏 隆

1

マルクスは1857年の『経済学批判』（以下『批判』）のなかで、富の原生的形態は剰余である、という見解をのべている。彼に先行したイギリスの経済学は、富を「諸国民の富」としてとらえ、その性質および原因の研究を開始した。マルクス自身は『批判』の最初に「ブルジョア的富」という言葉をおき、また、『批判』の要約といわれる1867年の『資本論』は、「資本制生産様式の支配する諸社会の富は……」と書き起している。

「諸国民の富」といい、「諸社会の富」といい、その富とは、正しくブルジョア的富であって、封建社会の富でも、奴隷制社会の富でも、また、そのような具体的な歴史にかかわりのない、いわば超歴史的な富でもない。そして最後に、ブルジョア社会の富ではあっても、大体において物質的な富でしかないプロレタリア的富でも、けっして、ない。

ところで本稿では、たとえば「ブルジョア的富」とか「奴隷社会の富」とかのように、現実にはそれぞれの歴史に規定され、また逆にそれぞれの歴史を動かしていく、具体的な富をとりあつかうつもりはない。人間の歴史にはじめてあらわれる富がまず当面の分析の相手であり、ついで、それがどのように富としての富へと発展していくのかをさぐってみたいのである。それではやはり具体的歴史的な富を相手にせざるをえないではないか、と言われることは予期している。本稿が、具体的歴史的な富の諸形態に共通の実体をもとめているので、あえて歴史的観点をぬき去った抽象論ではない、と言わないだけのことである。

だが、この作業が、実は、ブルジョア的富の解明の第一歩としてなされ

るのだということは、はじめにはっきりと言っておかなければならない。その理由は、先にふれた『資本論』の最初のところを、もすこし読みさえすればはっきりする。そこには「……諸社会の富は一つの『尠(ぼう)大な商品集成』として現象し……」(長谷部訳)とある。富は、だから、この場合商品の巨大な集まりとして *erscheinen* するのであって、けっして *reichtum* 商品集成ではない。つまり、上記の文は、もっとわかりやすく言いなおせば「富は一つの『ぼう大な商品の集まり』のようにみえる」ということなのである。それではいったい、富と、それであるようにみえる商品の山との、くいちがいはなにか、その解明の第一歩が本稿の役目なのである。⁽¹⁾

最近よく使われる言葉に「豊さの中の貧困」というのがある。この言葉は、どこかちょっとやり方を変えさえすれば、たちまち貧困は消えうせて、社会全体がバラ色の豊さにみちあふれる、というような幻想を与えてくれる。貧困は、豊さの中にあるのではなく、豊さからはじきだされてその外に、それと対立してあるのである。⁽²⁾ 豊さは、ブルジョア的富の豊さであり、貧困はプロレタリア的富の絶対的相対的貧しさなのである。このことが、さきの『資本論』の冒頭の、わずか2行に書いてあることである。

前稿(教・論, 18-4)で、剰余生産物発生の人類史的意義を考えた。それはかなり抽象的で、この現実とはおよそ無関係と思われる論稿ではあった。しかし、いま、前稿の問題をさきにのべたような問題意識のもとで、さらに教義論的に進めていくことが、ぜひとも必要であると思われるのである。それは、人類の未来にかかわるような今日の経済や政治の重大問題が、自然科学の分野をもまきこんで、あまりにも時務論的に処理されすぎている、という認識にもとづく。核兵器やエネルギーの問題はその代表的なものであり、「豊さの中の貧困」論も、一見、教義論的にみえて、その実、露骨ともいべき時務論的発想にすぎない。

(1) 「いずれにしても、ブルジョア的生産が生産者(=労働者)のための生産ではないということ、すなわちブルジョア的富の生産はそれらを生産する人々のための「豊富さ」の、すなわちその人々のための「必需品および奢侈品」の、生産と

は全然別のものであるということを、リカード自身ほど適切に明確に説明した者はいなかった。だが、このことは、生産がただ生産者の欲求を満足させるための手段であるにすぎない場合にも……………そうであるにちがいないであろう」（マルクス『剰余価値学説史』、マルクス・エンゲルス全集、XX VI, 61~62）

* マルクス・エンゲルス全集（大月書店）は、以下全集とし、ローマ数字で巻数、アラビア数字でページを示す。

(2) 「富は、つねに貧困を前提とし、貧困を発展させることによってのみ発展するものなのである」(ibid, 63~64)

2

剰余生産物の発生は2つの意味をもつ。1つは、前稿で論じたように、人間社会発展の物質的な基礎をなす、ということであり、他は、人間の労働にたいして、それを生みだすべく、なんらかの——自然的なまたは社会的な、経済的なまたは経済外的な（たとえば宗教や身分制など）——強制がはたらいた結果であるという意味である。⁽³⁾ 本稿ではとくに第2の意味こそ重要である。なぜなら、剰余生産物は最初は、たぶん、飢えから免れようとする本能的な自己強制の結果であったとはいえ、より多くの剰余物の生産には、他律的な強制がなければならない。⁽⁴⁾ 反面、剰余生産物の富への転態は、強制の結果としての剰余生産物のもつ限界を緩和することによって、強制の歯どめをはずすという相互関係にあるからである。

だから次に、剰余生産物発生メカニズムを検討し、その富への転化の様態を考えよう。それによって、奴隷制こそ、最強度の、しかも露骨な強制によって剰余物が収奪された時代であり、歴史の流れとともにそれは弱められ、資本制社会は、強制もなければ不払い労働＝剰余労働もない社会である、という神話は破棄される。

ここに生産者 A（個人としてでも、ある社会の生産者全体としてでもいい）がつくりだした生産物 P_a がある。A の周囲にいる扶養しなければならない老幼病弱者の分もふくめて、彼にとっての必要生活資料を N_a とし、 $P_a = N_a$ ならば、いうまでもなく、過剰は無である。もし、 $P_a > N_a$ であれば、その差 S_a はたしかに過剰な物であろう。だが、 S_a についていますこし見てみなければならない。 S_a は生活資料として生みださ

れた P_a の一部分であり，その日のうちに消費しなければ役にたたなくなる，たとえば魚介類のようなものから，半年か1年長くて2年ぐらいの期間にわたって徐々に消耗されていくものまで，いろいろなものがあるだろうが，いずれにせよ消費の対象でしかない。だから，かりに今日の労働で S_a が生じたとすれば，次の，たとえば明日の労働では， A は， $P_a - S'_a$ ひよっとすると $N_a - S'_a$ の生産量だけで満足するだろう。 S'_a は厳密に S_a に一致するとは考えられない，という意味だが，すくなくとも A は S_a の生産に費した労働を，無駄にすまいとする才覚はもつだろうからである。

A は，ライオンが，とらえた鹿を飽食して残余を放置し，他の弱小の動物たちに恵む王者のふるまいはとらないであろう。人間も，ライオンと同様に生活資料とくに食物の余りを捨ててかえりみななかった時代もあったであろうが，それはおそらく野蛮，未開初期の風習であり，しかもそれはライオンの王者のふるまいではなく，一刻も早く危険から遠のくためにすぎなかつただろう。すべての動物にとって，睡眠と欲望充足の時は実は最も危険な時なのだから。

人間は，他の弱小動物と同様に集団生活によってこの危険を避けようとしたらうことは，想像できるが，いろいろな才能は，危険から身を守るより多くの力を人間に与え，人間は食物をただ食い散らす時代から，「余りもの」をたくわえる余裕をえ，またたくわえる諸方法に知力をかたむけるようになる。そのたくわえの努力は当然のことながら S_a にむけられ，たくわえの期間の短いものはなるべく早く消費することによって有効に利用しようとするれば， A の明日の生産量は $P_{1a} - S'_{1a} = P_{2a}$ をめざすであろう。(1・2は生産の第1期，第2期) $P_a - S_a = N_a$ であるから， $P_{2a} = N_a$ つまり生産が必要生活資料の量に収斂していく傾向をもつと考えることができる。ところが，第2期終了時点に A のもとにある生産物量つまり生活資料の量は， $P_{2a} + S'_{1a}$ である。この場合，生産は自己のための使用価値の生産であり，閉鎖的社会における生活資料の量はかなり恒常的なものであるから， $P_{2a} + S'_{1a}$ もまた過剰を生じ， $P_{2a} + S'_{1a} - N_a = S_{2a}$ であろう。

A がつねに P を生産しうるなら、彼は次第に過剰をふやしうることになるが、前期の過剰を考慮に入れて生産しても、なお、ほぼ S 程度の過剰は維持していける。だが、ある日なんらかの事情で P が減少したりまたは入手できなかつたりすると、S はたちまち消滅せざるをえない。100日分のトウモロコシの過剰をもつことを習慣とするインディアンの部族が、100日間収穫がなければ飢えなければならないように、S はただ A の飢えをその消滅の時までひきのばすにすぎない。このように、S は不安定な過剰である。富という言葉はいろいろな形容詞をともなって使われる。「自然的な富」「人工的な富」「個人的な富」「社会的な富」「現実的富」「物抽象的富」「物質的富」「文化的富」等々。以上に見た S はたしかに自然的、現実的、物質的そして多くは人工的な富ではあろう。にもかかわらず、S の不安定さ、その余りのはかなさは、それを富と呼ぶことを躊躇させる。

では、いったい、マルクスが『批判』において、

「富の最初の原生的な形態は過剰または余剰という形態であり、生産物のうち使用価値としては直接に必要なとされない部分であり、あるいはまたその使用価値がたんなる必需品の範囲をこえるような生産物の所有である」（全集、XIII、106）

と述べたのはどのような意味なのであろうか。

S はまさしく「生産物のうち使用価値としては直接に必要なとされない部分」である。そして、われわれがこれを富と呼ぶことを躊躇するのは、とくに長期の保存に適しない生活資料にあっては、 S_1 は S_2 へ、 S_2 は S_3 へと生産の期間ごとに逐次更新されねばならず、また場合によっては S は N の補充として、あるいは前期の S がそっくり今期の N そのものとなるというようないややすさ、はかなさの故である。使用価値 S はつねに実現の危険にさらされているのであり、使用価値の実現とは、有用物としてのその消滅にほかならない。

マルクスは、このようにはかない過剰をも「富の原生的形態」と呼ぶ。もちろん、それはそれなりに理由あつてのことだが、それはさておき、先の引用の後段をみよう。ここは何気なく読むと、ただ前段を言いかえたに

すぎないように思われがちだが、けっしてそうではない。「単なる必需の範囲をこえるような生産物」⁽⁵⁾とは、前段のようにあるいは本稿で S であらわしたように、ただ量的に生活資料の必要分からはみだしたものではない。それは、ありきたりの生活資料ではない生産物——たとえば、掘りだされた宝玉とか、美しい鳥の羽根のようなもの——のことである。しかも、「その所有である」つまりそれにたいして、S にたいするよりにたまゆらではなく、長くわがものとしてふるまうこと、とはっきり前段と区別をつけているのである。前段の「直接に必要とされない部分」を「過剰」= *Überfluß*、後段の生産物を「余剰」= *Überschuß* と言ったのであって、いたずらに似かよった単語をならべたわけではない。さて、このように過剰または余剰として把握されねばならなかった「富の原生的形態」がどのように富としての富へと発展していくかを見ていこう。

『批判』はさきの文につづけて言う。

「……生産物のこういう過剰または余剰が、未発達生産段階では、商品交換の本来の領域をなしている。過剰な生産物は、交換できる生産物すなわち商品となる」(全集, XIII, 106)

ここでわれわれは、これまで生産者 A について論じてきたことが、結局、社会的形態にかかわりなく、たんに人間の欲望の対象であるという意味での富の内容をなす使用価値を見たにすぎず、マルクスが「経済学の考察範囲外にある」ものと言う、使用価値としての使用価値を論じたにすぎなかったことがわかる。これより、『批判』の第2の引用に従って、Sa を一定の経済的関係である交換価値の担い手としてとりあげなければならない。

われわれはすでに、A のもとに生ずる S が実は「過剰」と「余剰」とに分けて考えるべきことを知っている。『批判』第2の引用の中でも、この2つは厳密に、しかも微妙に考慮されているように思われる。⁽⁶⁾ だが、とりあえず、S を「過剰」として論をすすめていく。

A の生産物がただ彼自身の欲望の充足にのみ役立てられるかぎり、そこ

に生ずる S_a は、 S_a であることをやめて、消費されることのみとその存在の意義を見いだすのであり、ここには豊かになりたいという病的な欲望＝致富欲（Bereicherungssucht）の対象としての富の姿を見ることはできない。飢餓のために S_a を消費することも、ある意味で豊さへの志向であるというなら、マルクスにならって S_a を「そのほかぎりの富」と呼ぶことに躊躇しない。

さて、ここで生産者 B を仮定しよう。 B は A と同様に生活資料 P_b を生産し、 P_b は B の生活必需品 N_b より大であるために過剰 S_b を生じたとする。 A と B は互いに相手の生産物によって新たな欲望を触発され、たぶん、はじめは奪い合うことから、遂にはより平和的に交換をしはじめるだろう。その交換のための物的基礎はそれぞれの S 以外にはない。交換の比率はこの際問わないとして、いまや A のもとの S_b が、 B のもとの S_a が移されて交換が完了する。

A にとって過剰であった S_a は、 B にとってはもはや過剰ではなく、新たな欲望の対象として生活必需品であり、 S_b が A にたいしてもつ意味も同じであろう。もともと、そうであることがこの交換を可能にしたのだから。「交換の本来の領域」である過剰 S_a 、 S_b は、交換がおわると同時に過剰であることをやめる。とすると、このようなもっとも発生的な交換にあっては、なお「富の最初の原生的な形態」はただ、欲望の多様化とそれの充足という意味での物質的富にすぎず、直接に豊かさの実体となる。 A も B も、本来の N_a 、 N_b という物質的な豊かさの制限をのりこえて、 N_a+S_b 、 N_b+S_a という新たな豊かさをもつことになる。しかしながら、いかに珍奇とはいえ、生活資料として入手した、たとえば魚や穀物のようなものを、より多く、または無限に多く欲しはしない。それはある一定期間に一定量を入手できれば足りるのであり、もしそのとき入手できなければ、自分の過剰が交換の手段として役立たなくなるだけのことである。

N_a+S_b 、 N_b+S_a は、こうして A 、 B にとって豊かさの新たな限界としてあらわれる。彼らの、物質的富に裏付けられた豊かさは、さらに新欲望の開発されるまでは、使用価値としての $N+S$ の質的变化に比例する

だけだろう。

ここでもういちど『批判』にもどろう。マルクスは続けて言う。

「この過剰の十全な (adäquate) 存在形態が金と銀であり、金銀は富が抽象的社会的富としてとらえられる最初の形態である。諸商品が金または銀の形態で、すなわち貨幣の材料で保存されうるというだけではなく、金銀は保蔵された形態の富である」と。

この第3の引用が教えることは次の2つのことである。

- (1) 富は、保存され、保蔵されるものである。
- (2) それはまた、必要に応じて、いつでも、どのようなものとも交換しうるものである。

これまで3段に分けて見てきた『批判』の引用文を、はじめからふりかえてみると、第1段にあらわれる S_a は、とりあえずは「余りもの」=過剰であり、自分のつくったものが、つぎの消費の機会がくるまで、有用性を失わないかぎり、ある期間自分のもとにとどめておかれる、という意味で、上の条件の(1)をかるうじてみたす。第2段の分析でわれわれは $S_a \rightarrow S_b$ をみた。ここにはもはや条件(1)はなく、条件(2)が大きくクローズ・アップされる。第1段の S_a は、条件(1)をなんとかみたすとはいえ、保蔵の一定の限界をこえることは絶対にできない。第2段の S は、二重の意味で質的变化をとげる。まず、 S_a と S_b が入れかわること、つぎに、過剰がその入れ替りと同時に過剰ではなくなる、という意味で。そしてこの質的転換を通じて条件(1)は姿をかくす。

第3段にいたって金銀が登場し、条件(1)と(2)は同時に十分に満たされる。すなわち、それは第1段の S のもつ保蔵の限界をうち破り、永遠に保蔵されうる。それはその所有者の死後もなお彼の富として保蔵される。と同時に、金、銀は、他のすべての過剰 $S_a, S_b, S_c \dots$ といつでも交換しうるという絶対的可能性 (これはのちに貨幣にのみ許される直接的交換可能性 *unmittelbare Austauschbarkeit* の萌芽である) において、金銀としての S を保蔵することは、他のすべての過剰 ΣS を保蔵することであり、条件

(1)が同時に条件(2)をみたす。

さて、われわれはここで、もういちど、捨象されたままになっていた余剰 $\ddot{U}berschu\beta$ にかえろう。「たんなる必需の範囲をこえる生産物」である余剰は、第1段の過剰のもつきわめて不十分な、限界内での第1条件を、実ははるかに高い程度に具備していた。第2段では、「交換できる生産物すなわち商品となる」物を、マルクスはたんに「過剰な生産物」 $\ddot{u}berfl\ddot{u}ssige\ Products$ と表現して、あえて $\ddot{u}bersch\ddot{u}ssig\ Produkt$ を現実の商品化の過程から脱落させた。では、余剰は、ついにただ富の原生的形態におわってしまったのだろうか？ その答えはもちろん「否」である。「たんなる必需をこえる生産物」である余剰は、第3段において、光り輝く金、銀となって、完べきな富として姿を現わしているのである。3つの段階にわけての引用を軸にして進めた剰余生産物の富への転化の分析の、本流は、実にこの余剰から金銀への、つまり必需品たりえない剰余生産物の流れにほかならないのである。

条件(1)と(2)は、すべての生活資料＝生産物においては、全く矛盾する2つの条件である。A が S_a を保蔵することは、その保蔵の限界内に使用価値としての S_a を自ら実現しなければならないということであり、 S_a を S_b と交換することは、自分の S_a の保蔵の限界を知るが故にこそ、偶然におとずれた交換の機会をのがさず自分の過剰を手離して、条件(1)をふり捨てて他人の過剰を自己の必要として消費することであるから。A にとってそうであることは、相手の B にとっても同様である。

しかし、いまかりに S_a が金であるなら、A がその S_a を保蔵することは、同時に ΣS を絶対的可能性において保蔵することであり、それ故に抽象的意味でも現実的意味でも富を永遠に保蔵しうることである。金＝ S_a を手離して S_b にかえることは、抽象的一般的富を現実的富にかえ、それを費消してしまうことだが、富そのもの、抽象的富は、ただ A から B へとその持ち手をかえるだけで、永遠にその輝きを失いはしない。B の

もとで、依然として条件(1), (2)を十全にみたます富でありつづける。

ところで、さきに3段に分けて引用した『批判』の文章は、周知のように、「資本一般」の第2章第3節の論述のなかに登場するもので、したがって、引用第3段の金銀は、資本制社会における商品、貨幣をすでに、所謂第一の道の出発点においたうえでの、貨幣材料としての金銀の把握である。しかし、本稿の分析のこの段階では、なお金銀はPのすべてではなく、Sを支配してその化身として振舞っているにすぎない。文明の初期においてすでに金銀が貨幣としてあらわれている⁽⁷⁾とはいえ、おそらくそれ以前の途方もない古い時代に、人類が金や銀にある特別の関心をもったであろうことはまちがいないことである。その歴史をたどることは本稿の目的ではないが、しかし、富の一般的抽象的形態が、金銀にそして貨幣に定着するまで、長い年月と無数の段階、形態が存在したのであって、次節以下においてそのことにふれて、剰余生産物の富への転化の様態を理解しなければならぬ。

(3)(4) この問題は、直接のテーマではないが、諸家の考えを紹介しておこう。

H. プレイヴァマン、『労働と独占資本』、岩波、61に「人間労働は、周知のようにそれが消費する以上のものを生産できる。そして、この“剰余労働”を生み出す能力は、しばしば人間あるいはその労働が有する特殊な神秘的な能力として取り扱われている。実際にはそれはそうしたたぐいのものではなく、労働が自己を再生産しおわった時点……を越えて行なわれる労働時間の延長にすぎない。この時間は（必要労働時間や労働の強度、生産性が一定なら）確定されている。牛もまたこの能力をもっている。……それゆえ、人間の労働力に独自の能力は、剰余を生み出すことができるということではなく、むしろそれがもっている知的な合目的な性質である」プレイヴァマンは、誰が剰余を生み出すことを「目的」にするのかを忘れたために、牛も「知的な合目的な」仕事をする、という不思議な考えをのべるのだが、それにしても、剰余労働を人間労働の神秘的な能力と考えることを拒否した点は正しい。

大内・鎌倉編、『経済原論』、有斐閣新書、68、「人間の労働力は本来必要労働以上の労働を支出しうる。奴隷がもし一日働いてやっと自己の再生産しかなしえないのであれば、奴隷制社会は成立しえなかつたであろう。……剰余労働はどの社会にも存し、どの社会発展にも不可欠である。……必要労働と剰余労働との存在は、階級社会であろうとなかろうと、労働・生産過程の普遍的な原則である。労働力にこの属性があるからこそ、……階級社会も成立しえたのである」（傍点

は引用者) この考えは、剰余労働の支出が「本来」的なもの、労働力の「属性」である、とする点、プレイヴァマンと全く反対である。ところでこの考は実は「剰余労働は、しばしば誤解されるように、資本主義独自のものではなく、あくまでも社会一般的なものである」とすることによって、資本主義生産における搾取を免罪するための理論となっている。

マルクスは『資本論』、第1巻、第14章で(全集, XXIII-b, 667, 668) 自然条件と剰余生産物の関係を論じて「自然条件が剰余労働に作用するのは、ただ、…他人のための労働を始めることができる時点を決めることによって、である。(資本制社会では) 剰余生産物を提供するという事は人間労働の生まれつきの性質であるかのように思われやすいのである。(恵まれた自然条件が人に) 直接に与えるものは、多くの暇な時間である。彼がこの時間を自分のために生産的に使うようになるには、いろいろな歴史的事情(=なんらかの強制)が必要であり、この時間を他人のための剰余労働に費やすようになるには、外的な強制が必要である」(カッコ内引用者)と述べている。自分のために、も然り、言わんや他人のために、においておや、である。

この問題については『思想』、岩波、No. 657, No. 658 の山内昶氏の論文を参考にするとさらによくわかるだろう。

- (5) この「 」内は、武田・遠藤その他による岩波文庫の『批判』の訳文を用いた。それは、Bedürftigkeit の訳を「全集」の「必需品」とすることに若干疑念をもったからである。原文を示しておく、

……solcher Produkte, (deren Gebrauchswert) außerhalb des Kreises bloßer Bedürftigkeit fällt. (*Zur Kritik*..., Dietz, 1971, S. 130)

- (6) 第二引用文で Überfluß と Überschuß とが、ともに「商品交換の本来の額をなす」といいながら、実際商品となるのが überflüssig なる生産物だとして、ここでだけは überflüssige oder überschüssige Produkte werden…としなかったか、実に微妙である。この問題はのちに、本稿で、富としての富の2つの条件を考察する際触れる。

- (7) B. C. 269年、ローマ人は銀貨を鑄造した。B. C. 49年 C. J. Cæsar が金貨 aureus を鑄造した。ローマの貨幣は次のとおりである。

aureus	(金)	= 100 sestertii	= 1ポンド
denarius	(銀)	= 4	ク = 9 $\frac{3}{8}$ ペンス
sestertius	(青銅)		= 2 $\frac{2}{5}$ ペンス
as	(ク)	= $\frac{1}{4}$ sestertius	= $\frac{3}{5}$ ペンス

(研究社、羅和辞典、付録)

金は銀とともに古くから貨幣として(鑄貨とはちがう=引用者)使われた。エジプトでは B. C. 3600年ごろから、中国では B. C. 2300~2200年ごろから金が貨

幣として登場したといわれている。銀も B. C. 2000年頃、ハンムラビ法典が賃銀、価格、罰金を銀の重量で定めている。金、銀比価はローマ帝国内1:12、同時代インド、アラビア、アジア、アフリカ、スペインでは1:6~6.5 (K. K. 鹿島研究所出版会、『社会科学大事典』)

3

金や銀が、抽象的一般的な富=富としての富となる前に、それへの定着までの過渡的な形態を、金や銀そのものではなく、もっとわれわれの生活に身近なものなかにさぐってみたい、という気がする。前節の分析のなかで、生活資料の生産の過程で発生する剰余生産物（結果的にはそれは剰余労働になるわけだが）が、たとえ自然経済的なまたは現物経済的な交換の対象となりえても、けっして、十分な意味で富とはいえない不安定な一時的な「その場かぎりの富」(『批判』, 全集, XIII, 109) でしかないことを知った。

ここで、われわれは、L. H. モルガンの『古代社会』のなかに、次の重要な指摘を見いだすのである。

「家畜は、これまでに知られていたあらゆる種類の財産を合せたよりもいっそう大きな価値のある所有物であった。それらは食用に供せられ、他の物資と交換され、捕虜を釈放するために、また、罰金の支払いに用い、そしてまた宗教的儀式の執行に際し犠牲にささげられた。そのみならず、それらは無限にその数を増加することが可能⁽⁸⁾であったから、それらの所有は人心に最初の富の概念を知らしめたのである」(岩波文庫, 下, 383, 傍点引用者)

モルガンの言うところを要約すれば、家畜は他の財貨にくらべて用途が広く、無限の増殖が可能だから、ほんとの富らしい富と考える最初のものだ、ということになる。

モルガンのこの鋭い指摘を、従来研究された牧畜文化の歴史の上において眺めてみることにしよう。そうすれば、マルクスが「富の原生的形態」と呼んだものに、ちがった角度から照明をあててみることになるだろう。

民族学的な経済史や文化史的民族学さらに考古学等の分野における、牧畜文化の起源に関する研究は、19世紀中期から今日まで二転三転しながら、結局は、オリエントならびにソ連邦内の考古学的発掘調査によって、ドイ

ツの経済史学者 Eduard Hahn の説にもどらざるをえなかった。ハーンこそ、歴史学発生以来19世紀中葉まで(具体的には、F. リストの国民経済発展の5段階説をあげることができる)ほとんど無批判に踏襲された、狩猟—牧畜—農耕という直線的発展説のなかでの牧畜の位置をくつがえしたのであった。彼は、牧畜の発生が農業を前提としてはじめて可能であることを主張した。その理由は次の2点に要約される。まず、従来牧畜に直接先行すると考えられた時代の狩猟民が、野生の動物を生捕りにして馴致しえたとしても、これをただちに繁殖させることは不可能であるという点、⁹⁾ つぎに、牧畜民で、農耕民と完全に離れて肉や乳など牧畜生産物だけを食料とする例のない点、である。

それでは農耕文化のなかからどのようにして牧畜が生れるのか? ハーンはその事情をつぎのように説く。すなわち、大地の母神を崇拝する古代オリエントの農耕民が、野生の牛や羊を聖獣として、いけにえとして、女神に捧げるためにそれらの動物を飼いたくわえる必要があり、これがのちに牧畜への道をひらいたのだ、と。

さて、このようなハーン説を、牧畜文化起源説の定説、すくなくともその主流として受けいれるとして、今日、われわれに残されているヘブルびとの歴史、旧約聖書の世界をかいま見るとは興味深いことである。

ハーンの説に従えば、野生の獣を、それと品種を異にする家畜へとセレクトしていくためには、長期間の野生の群との隔離が第一に必要であり、この隔離のために、さらに、自らの生活の安定が前提とされねばならない。それには、はじめから捕獲した野生の獣とともに草原地帯を放浪するのではなく、とにかく家畜化が完了するまでは、定住農村の内部において馴致と品種改良とにつとめ、なんとか繁殖の可能性を見定めたいうえで、その専従者は家畜化した獣群をひきつれて母村を離れ、草原の牧地に新しい生活の拠点を求めるようになったのではないか、牧畜に適する乾燥した草原地帯は農耕には不適の不毛の地ではあるが、畜群にとっては農耕ほどに大量の水を必要とするわけではない、こうして、たとえば内陸アジアの大草原地帯には、南の方から、水と草を追って移動する遊牧生活の形式が北に

向ってひろがっていったと思われる、というのである。

ひとつのイスラエル史はつぎのように言う。

「カナン征服の時代は、イスラエル民族にとって一大過渡期であった。すなわち、荒野の遊牧民族からパレスチナ定住の農耕民族へ、荒野の孤立民族から回廊地帯の国際民族への……転換である」（日本基督教団出版局、聖書辞典、総説、イスラエル史）

B. C. 2000年ごろにはじまるヘブルびとの歴史、その初期の族長時代、出エジプト・荒野の時代そしてカナン侵入・征服の時代とはどのような時代なのか。上記『聖書辞典』によれば牧畜＝遊牧から農耕への移行の時代と考えられ、一方ハーン説によって推理すれば、母村の農耕文化圏を離れて新しい牧畜文化の拠点を求めて所謂「三日月形沃地帯」を放浪しはじめる人々の歴史となる。その「母村」を人類初期農耕時代の広漠たる歴史を形成するスメリア諸都市のなかにもとめうるとすれば、そしてスメリア民族がすでに家畜として牛、ろば、羊、山羊（馬を欠く）をもっていたとすれば、われわれは、牧畜→農耕か、農耕→牧畜か、という直線型の発展史を放棄して、……農耕→牧畜→農耕……という複線的なもしくは波状的な発展を承認しなければなるまい。だが、いずれにせよ、神はすでに牧者であり、王もまたアブラハム以来羊飼い、庶民を迷える羊にたとえ、それを善導する人を牧師と称する社会は、牧畜文化の流れの中におかざるをえない。だから、ヘブルの人々の神事である供え物と犠牲とが、ほとんど牛、羊、山羊に占められているのは当然のこととしても、牧畜民ヘブルびとがそこから離れてきた農耕的母村においてもまた（ハーンによれば）大地の神＝農耕神である女神に家畜とくに牛を聖獣としてささげるということ、これは富の研究にとってきわめて重要なことと思われるのである。つまり神事の材料としての聖獣＝牛・羊・象などが、牧畜の起源であり、そこから家畜が発生するということを深く考えなければならない。

神はなぜ、地を耕す者であるカインの供えた土よりいづる果(み)をかえりみず、羊を牧(か)う者であるアベルとその供物をかえりみたのか、なぜ大地の女神は牛をいけにえとして要求するのか、動物犠牲がとくに血と

脂肪⁽¹⁰⁾を重視するのはなぜか。

血が生命を代表し、贖罪の力をもち、脂肪は血と同じく神に帰すべきもので、決して人間が食用にしてはならない、とされたのはなぜか。⁽¹¹⁾

牛や羊の肉は食べてもいいが、血と脂は一滴たりとも食べてはいけないよ、と言うばあい、われわれは高利貸シヤイロックの苦悩を思いうかべるのだが、もちろんわれわれの興味は、アントニオの危機を美しい恋人ポーシヤがすくった、というそのことではなく、強欲非道のユダヤ人（としてえがかれる）シヤイロックも引きさがらざるをえなかった血にたいするおそれのはげしさ、なのである。

牛、羊、その他の聖獣は、上記のような宗教的戒律⁽¹²⁾のなかでは、本来けっして一般の生活資料とはなりえない特別なものであったにちがいない。神にとって、カインのささげた生活資料の余りものとしての農作物は、けがれていて価値がなく、アベルの羊の初子こそ、けがれなくおのれにふさわしかったのである。アベルにとって小羊は、自分の生活資料にはぜったいになりえないもの、彼の「必需の範囲をこえる生産物」であるが、神のごきげんをうかがう道具としては、とても役に立つものである。神への供物である地の作物も羊の初子も、二人にとってそれぞれ過剰・余剰な物ではあるが、神にたいする役立ちは天地の差があった。

さて、以上の分析を通じて、牧畜生産物としての家畜が、本来、生活必需品でもなければ、それを人間に提供する道具でもなく、むしろそれ以外の用途、罪のつぐない、神への服従のしるし、としての役割をもって登場したことを知る。モルガンが『古代社会』の中で列挙した家畜の用途は、その発生から考えると、ちょうど逆の順序に読んでいいのではないか、と思われる。すなわち、犠牲、罰金の支払い、捕虜の釈放、他の物資との交換、最後に食用となる。そして、そのはじめの3つは、それによってえられる効果が現実の生活には直接にはかかわりのないものだ、ということに気づく。そのような効果をもつところにこそ、家畜の一般的抽象的な富性格があらわれているのであって、しかもそのような富性格が、直接に生活資料を生み出す労働ではなく、余分の労働、だが、してもしなくてもいい

というのではけっしてなく、その労働の成果としての家畜を用いてはじめて、罪がつくなわれ、身をきよめることができる、という、一種の精神的強制によってなされる余分な労働の生産物によって示されるのである。

つぎに、第2節でのべた富性格の2つの条件にてらして、いままでのべてきたような宗教的戒律から解放されたものとしての家畜を見てみよう。

前節でとりあつかった Sa, Sb……はいずれも、2つの条件を同時に満たすことはできなかつた。家畜という生産物はどうであろうか。家畜は、肉や乳のいわば生きた貯蔵庫であり、貯蔵庫そのものがある年月（すくなくとも前節の生活諸資料の保蔵期間をはるかに上まわる年月）を野生の草をたべて生きつづけ、しかも、古くなれば新しい貯蔵庫に生れかわり、繁殖していく。また、それをいけにえにつかう場合から肉としてたべる場合までのすべてをふくめた自分にとってのその用途の多岐性⁽¹³⁾、またその用途の多岐性を利用して必要に応じていろいろなものにとりかえることができるということから、第2の条件にたいして一般生活資料のもつ使用価値の限界を大きく乗り越えるのである。

8) 家畜の食料となる牧草が野生のままであり、したがって自然条件に大きく左右されやすいから、畜群もある限度以上に増大しえない。だからこの「無限の増加の可能性」については若干の疑点が残るけれど、たしかに、後述のように、保蔵の限界に関してこれまでの財貨と異なることは事実である。

9) 家畜とはたんに野生動物を飼い馴らしたものではない。野生獣とは品種を異にするまでに選択をかさねて、その子孫もまた家畜として生まれるものを言うのである。したがって家畜をつくりだすためにはかなりの長い年月と人間の専従的な忍耐と努力とを必要とする。

10) 創生期、(口語訳) iv, 4, 「アベルもまた羊の初子(ういご)を^{あぶら}み^ともにささげた」

11) 利未記(文語訳), iii, 「脂(あぶら)はみなエホバに帰すべし 汝等は脂と血を食(くら)ふべからず是は汝ら^がそのすべての住処(すみか)において代々永く守るべき例(のり)なり」

12) 神がしてはならぬと命じたすべてについて、しらずに犯した罪を許してもらうためには、「罪祭」を神にささげなければならなかつた。「罪祭」は身分貧富によって大体つぎのように定められた。

大祭司	雄の小牛
金会衆	ク
牧伯（つかさ）＝属官	雄の山羊
普通人	雌の山羊か雌の小羊
極貧者	小麦粉 $\frac{1}{10}$ エバ（1エバ＝23～36l）

利未記, v, には, 上記の定めを補完するように

「もしこ羊にまで手のとどかざるときは……」とか, 「もし山ばとや家ばとのひなも手にはいらぬときは……」というように, 一段低いランクの罪祭を他から買いもとめることを定め, 傷のない雄羊一頭を, 銀数シケルと評価している。銀数シケルとは大体 60gr. ～70gr. の銀にあたる。

- (13) モルガンの言う「他の物資との交換」は, 必ずしも生きた家畜を単位とするものではないだろう。家畜が生きて提供する用役はほんの一部にすぎない。家畜の代表としての牛馬の用途をざっと示せば次のとおりである。

運搬交通用として	馱載, 牽引, 騎乗
食料として	肉, 乳, 血, 脂肪, 内臓
衣服, 天幕, 容器として	毛, 毛皮, なめし皮, 臄
道具, 器物として	角, 骨
燃料, 肥料として	屎尿

従って, 『諸国民の富』のなかで, A. スミス が例証する「ダイオメデスの甲冑の値はわずか牡牛 9 頭で, グラウカスの甲冑の値は牡牛 100 頭だった」のような用いかたは, 特殊なものと考えていい。スミスは, 同じところで「家畜は畜取引の用具としては最も不便なものの一つであったに相違なからう」と書いているが, 明かに取引単位を固定化する誤りにおちいつている。

4

この節では, 第 2 節の『批判』の引用の第 3 段目に登場した金, 銀について考察を深めよう。「生産物のうち使用価値として直接に必要とされない部分」が過剰物であり, 「たんなる必需の範囲をこえるような生産物」が余剰物であるなら, われわれはただちに, 金, 銀は本来余剰な物だったのだ, と断言することができる。銀はともかくとして, 金が電導性のよさやさびたりくさったりしない性質から, 工業用品として需要されることは, 最近のことで, 本稿が視点をあてている時代にあって, とくに金は庶民にとって生活必需品どころか, その必需品のための労働手段として直接使用

されることは全くなかったのであるから。⁽¹⁴⁾

金銀が人間の生産活動にとって無用の長物であったことが、逆に金銀を非生産的な面で貴重なものにした、と言えば、逆説的に聞えるかもしれないが、正しくそうなのである。金銀が「金属一般の使用価値の基礎をなす諸属性を大巾に奪われている」⁽¹⁴⁾ 反面、それらは他の金属にまして「美的な諸属性」にめぐまれていたことが、そのような結果をもたらしたのである。われわれは前節で旧約の世界をのぞいたので、ここでもついでにその世界で、金銀がいかにその美的属性を珍重されたかをみてみよう。

金銀ともに、幕屋や宮殿神殿の器物の表面をおおったり、とくに宮の建物自体を飾るために豊富に使用され、(日本においては、この時代にくらべてはるかに最近、金閣や銀閣、金色堂や金箔でおおわれた諸仏像の例は限りない) その他偶像、冠、くさり、指輪、耳飾りなどの装身具に用いられた。銀は金よりもさらに、金持ちの家具、柱座、柱頭、けた、柱のかぎ、皿、鉢、たらい、燭台や机などの材料になった。これらはいちいち引証するまでもなく、旧約聖書の頁をめくりさえすれば、いやというほど出てくるのである。⁽¹⁵⁾ だが、これらはとりわけユダヤの諸王をはじめ、近隣諸国の王、国の牧伯(つかさ)そして富者たちの家具や装身装飾具であって、「(ヒラムの) 僕等(しもべら) ソロモンの僕とともにオフルに往きてかしこより金450トラントを取りてソロモン王のもとにたずさえ来れり」(歴下, viii, 18) または「ソロモンの所に来れる金の重量は666トラントなり」(同上, ix, 13) 「また……アラビアのすべての王および国の牧伯らもまた金銀をたずさえ来れり」(同上, ix, 14) 等々であって、⁽¹⁶⁾これが新約聖書に言う「ソロモンの栄華のきわみ」の基礎なのである。新約は、これを「野の百合の一つにも如かず」としりぞけて、貧しい庶民には「明日のことを思い煩ふな、明日は明日みづから思い煩はん。一日の苦勞は一日にて足れり」(マタイ伝, vi, 34) と説く。貧乏人はその日その日の生活資料さえつくり出せばいい、明日の分はまた明日のことだ、というわけである。

しかし、ソロモン王のもとにもたらされる金銀財宝は、どこで、誰によって採取され、精錬細工され、運搬されるのか? タルシシやオフルやハ

ピラなど金銀の産地において、ソロモンや諸王諸地方官の僕等および産地住民たちによって、である。聖書辞典によれば、1タラントとは、一人前の若者が一度に運ぶ適当な重さ、とある。666タラントの金は、約23トンの重量である。われわれは、数百人の屈強な若者が、背に1タラントの金塊を負ってエンエンとソロモンの宮殿をめざして歩いている有様を想像することができる。採取し、細工し、運搬する労働は、ソロモン王にとっては必要な労働であろうが、庶民にとっては余計な労働である。

マルクスは金銀についてつぎのように言う。

「金銀は（軟らかいので）直接的生産過程の内部では役に立たないのであるが、これと同様に生活手段として、消費の対象として現われる場合にも、なければなくてもすむものである。……他方で金銀は消極的な意味で余分な、すなわちなくてもすむ対象物であるばかりでなく、金銀の美的な諸属性は、それを華美、着飾り、盛装、日曜日にふさわしい諸欲望の天然の材料に、つまり贅沢と富の積極的形態にするのである」（『批判』、全集、XIII、131、132、傍点引用者）

額に汗して土地を耕し、ピラミッドや万里の長城に石を運びあげる庶民が、指に金の指輪をはめ、くびに金の首飾りをするのが不相応であり、したくてもできず、またしたいとも思わないのは、現代の労働者が、自家用飛行機や高級自動車などなどを持つに相応しくなく持てもしないのと同様である。まさに金銀はなくてもすむ対象物にすぎない。それがなくても人々は生活のための必要物を自らつくりだし、乏しくても過剰物を交換することによって、彼らなりに次第に欲望をひろげていき、そうすることによって彼らなりに物質的に豊かになっていく。

ところが他方では、そのような自然経済、現物経済に並行して、またそれをのみこみ崩壊させる勢いをもって、支配者や権力者たちを中心に、金銀を媒介とする生産物の取引も発達していく。彼らが輝くばかりに身を装い、あるいは、彼らが欲するとき欲する物を手に入れるための手段である金銀⁽⁴⁷⁾は、経済外的な、たとえば宗教的な力による、庶民の、余計な、強制された労働、つまり剰余生産物としての金銀であり、それはすでに物質的にも抽象的にも完成された十全の富である。しかるに、それを採

取し運搬する労働を提供した人々にとっては、富ではない。人々はただ支配者や権力者を通じてそれを神に捧げたことになるのであり、支配者の、そして神の宮殿が、また偶像が、「地下界から堀り出されたまじり気の無い光として」(『批判』, 全集, XIII, 132) 輝くとき、その輝きの前にひれふし、その輝きが自分を守ってくれると信じ、満足し、明日もまた自分の生活資料を手にいれたら、余力でソロモンのところへ金を運ぼう、と決意するのである。

原始宗教における神の自然的姿態は、文明の初期に人間的姿態へとかわり、支配者=国王を神の子孫とし、神と同一視することによって、畏敬と隷属をしいる階級支配のイデオロギーをつくりだす。それはもちろん文明初期の経済的土台に規定されて形成されるのだが、逆にそれは剰余労働の収奪の機構すなわち、金銀財宝を営々としてソロモンのもとへ運ばせる機構を維持し、固定化する。

(14) 「金属一般が直接的生産過程の内部でもつ大きな意義は、生産用具としての金属の機能と関連している。ところが金銀は、……鉄はもちろんのこと、銅(合金)とくらべてさえきわめて軟らかいので、生産用具として利用することができず、したがって金属一般の使用価値の基礎をなす諸属性を大幅に奪われている」(『批判』, 全集, XIII, 131)

(15) 旧約中の個々の使用例をあげることは不必要かつ不可能に近い。次の引用が人類と金銀とのかかわりを象徴すると思うのであえてかかげる。

創生記, ii, 10, 河エデンより出で園を潤しかしこより分れて四つの源となれり 11, その第一の名はピソンという是は金ある ハビラの金地を繞る者なり 12, その地の金は善し……

ハビラは旧約の各処にあらわれる金の産地で、アラビア中南部イエーメン北方の山岳地帯とその近接地方と考えられる。この文は砂金の採取を連想させる。エデンの園と人間登場の物語りは旧約の2 ページ目にあたるが、ここに「金」が登場することはわれわれにとって極めて象徴的である。

(16) 1 タラント=34.4kg

(17) 創生記, 23章に、アブラハムが妻サラの墓地を購入するくだりがある。xxiii, 16 「アブラハム エフロンに言に従いエフロンがヘテの人々の聴ける前にて言いたる所の銀を秤りあきうどの中の通用銀400シケルをこれに与えたり」(400シケルは約4.6kg)

5

富の原生的形態が過剰または余剰という形態である，というマルクスの言葉をたよりに，その過剰または余剰の発生の時期に焦点をあわせて，それがどのように富の十全の形に結晶していくかを見てきた。そして知りえたこと——いや，むしろ再確認しえたことは，富が富としてはじめから神や支配者や富者やのところにあるのではなく，直接生産者の自己のための労働の余りものとしてはじまる剰余生産物分の労働が，なんらかの必要ないし強制によってなされるようになり，それによって生じる剰余が，あたかもそうすることが自己の本来の生活の生産の条件であるかのように，むしろ積極的に神や権力者のもとに運びこまれるという形で収奪されるという，実に単純なパターンにはほかならなかった。

このあと，この剰余物が封建地代——これは現実には労働地代や現物地代や金納地代になる——，最後に剰余価値に転態するのだが，いずれの姿をとるにせよ，これら歴史的具体的諸形態に共通の実体が，剰余労働であるという意味において，またすでに前節で見たように，遠い文明の初期においてその輝きを人間の前に現わした金銀のもつ完べきな富性格を，剰余のいろいろな変形において追求するという意味において，全く一貫していることは明らかである。にもかかわらず，この一貫した流れの底にゆるやかに変化していくものを認めることができる。それは最初は過剰物はその使用価値としての限界をのりこえるために交換関係に入りこみ，したがって商品化し，⁽¹⁸⁾ ついでその商品化の波が次第に過剰でも余剰でもない，生活資料自体の周辺を洗いはじめ，最後に，すべての生産物がその波の下に没し去って「巨大な商品集積」となって打ち上げられる，という商品経済の3つの変容である。

この変容は，商品という形態をくぐらせることによって剰余生産物の姿を次第に拡散させ，見失わせる。はじめに，剰余物が必要物になり，つぎには必要物であるべき部分が剰余物であらわれ，最後には，すべてが必要物であるかのように現象する，というふうに。資本制生産が最高度に発達

した商品生産であるということは、ブルジョアの富を、いちど「巨大な商品集積」のうちに最大限に拡散させ、その富の実体が剰余労働であることを見失わせる最高のしくみである、ということである。

商品経済の発展はまた貨幣通流の発達でもある。注(7)で示したように、紀元前数世紀以降鑄貨があらわれる。だが、それら初期の貨幣（金銀地金をふくむ）はまだ、商品流通のなかを泳ぎまわる現代的通貨からはほど遠い。『批判』はつぎのようにのべる。

「使用価値は……消費させられることによって使用価値として役に立つ。しかし貨幣としての金の使用価値は交換価値の担い手であることであり、形態のない素材として一般的労働時間の物質化したものであることである。形態のない金属として、交換価値は不滅の形態をもつ」（全集，XIII，106）

ここに「形態のない金属」とは、一定の使用形態にしばられないということ、鑄貨から地金へ、そこからさらに指輪、首飾り、王冠などの奢侈品の形態が権力の象徴へ、またこの逆の方向へと変ることができ、また変りえなければならぬということである。⁴⁹⁾ このような「形態のない金属」として、初期の貨幣は動く前にまず沈潜する。古代において全面的に——個人においても国家においても——あらわれるのは蓄蔵貨幣である。つまり金銀を素材とする貨幣をたくわえることが、直接に致富欲をみたすこととなる。これは17世紀の重金主義まで正統に受けつがれる。『批判』は、アジアやエジプトの古代において蓄蔵貨幣が王や僧侶の権力をあらわし、また「ギリシャやローマでは剰余物のいつでも確実な、いつでも利用できる形態として、国有蓄蔵貨幣をつくることが政策となっている」（全集，XIII，106）

貨幣の機能は通常、価値尺度、流通手段を本源的機能とし、そこから派生する機能として支払手段、蓄蔵貨幣、世界貨幣の諸機能をもつと説かれる。だが、この配列が必ずしも貨幣発達の歴史的順序を示すものでないことは上述より明かである。

ところで、貨幣はいまひとつの重要な機能を獲得する。それは、資本の機能である。資本の機能とは、交換価値としての貨幣が、自立的に自己を

増殖していく機能をいう。たんなる貨幣の増殖の機能は、「前期的」資本としてローマの時代までさかのぼりうる。しかしそれが前期的と言われるのは、自立的でないからにはほかならない。その意味で、家畜はローマよりも古く、「自立的に」繁殖するという点で、はるかに近代的な富の要素を具備しているといえる。モルガンの「最初の富の概念」という表現の根拠もここにあると思われる。

これまで、金銀を素材として考えてきた。ところがいまでは、金銀は貨幣材料でもなければ、兌換の対象でもない。にもかかわらず、貨幣はいぜんとして富でありうるのはなぜなのか。

国家がそれに与える強制通用力は、紙きれにすぎない貨幣の代用物に、貨幣の円滑な機能を保証し、強制的に直接的交換可能性をもたせる。だが、それは富たる第(2)の条件をみたすにすぎない。なぜ人は金でも銀でもない貨幣＝紙幣を保蔵して、それが富であるための第1条件をもみたすのか。それは、増殖をとまなう保蔵が可能であり、増殖欲が致富欲となるからである。人は金の指輪を小箱に保蔵するように貨幣を保蔵するのではない。

いまや富の条件は、「保蔵し交換することが、つねに増殖することである」という風に変化する。交換が同時に増殖となるとき、貨幣は資本と呼ばれはじめる。そして、貨幣を手離すことがたんなる支出ではなく、投下と呼べるのは、その貨幣を自立的に増殖させるための手段を購入するときである。

さて、貨幣はいかにして資本の機能を獲得するか？ 第1に、あらゆる手段（先述の前期的資本の機能であれ、海賊行為であれ）を動員して自らを蓄積すること、第2に、蓄積された貨幣的富が、購買しうる人間労働力を見いだすこと、である。さきにのべた商品経済の変容の最後の波は、人間の労働力をもその下につつまこむ。労働力は商品となり、したがってまた生産点において資本となる。それは、労働者が、「自分の生存のために労働することの許しを、ただ剰余労働 ~~XXIII-28~~ によってのみ償う」（Marx, *Das Kapital*, Dietz, Bd. I, S.537. 全集, XXIII-b, 667）ことに他ならない。

(18) 「(交換が) 過剰の生産と過剰の生産物だけについておこなわれ、けっして生産

物の総体にはおよばなかった以前の生産の段階」(Marx, *Grundrisse*……, E. V. F., S. 309. 高木監訳, II, 334)

- (19) 「衣服, 装飾品, 家畜などのような特殊な自然的富または使用価値にたいする欲求とは区別された致富欲」と, マルクスは『批判』(全集, XIII, 111)にのべているが, 本稿第三節は, 家畜を他の自然的富に比して「形態のない」自然的富として措定する。

6

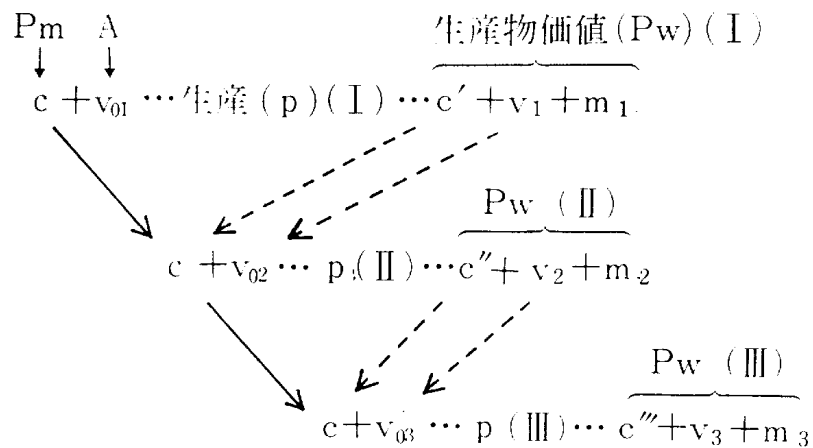
前節で, 商品経済の3つの大きな変容を示し, この変容が富にたいして果す役割をのべた。現代の最高度に発達した商品生産社会では, 富の実体をなす剰余が, 剰余労働が, すべて必要物であるかのように商品の形をとってあらわれる, と言ったのは, すべての商品のなかに労働者の剰余労働が含まれていて, すべての商品が, 安っぽいものから豪華なものまで, お金さえあれば誰の手にでもはいるように店頭には並べられ, それが貨幣として実現され, つまり売られて, 含まれていた剰余労働分はブルジョワジーに帰属していく, そして, どこにどれだけ剰余労働が含まれていたかは, ブルジョワ自身にだって, わからないようになっている, という意味である。それがわからないから, ブルジョワジーは, 剰余労働の搾取などとはとんでもない, 労働者にはその取り分を社会の富の中から配分しているし, 私も私の正当な取り分をもらっているにすぎない, と言うことができるのである。労働者の取り分のことを「労働分配率」と言う。この言葉を中心して事態のからくりを考えよう。

資本家は, 生産を行うために資本を投下して,⁽²⁰⁾ 生産手段 P_m と労働力 A を購入する。資本価値であらわせればそれらは不変資本 c と可変資本 v である。生産は次表のように行なわれる。

* 次表は, 単純再生産を示す, だから m はすべて資本家によって消費される。

* 生産物価値 (Produktenwert 次表 P_w) 中の c' , c'' , ……は, 各期に消費または消耗する P_m の量である。

* しかし P_m 中の労働手段は耐用期間中固定的に使用されるから $c \rightarrow c$ で示した。



問題の剰余生産物は m であり、その価値表現が剰余価値である。いまかりに剰余生産物も、剰余価値もない、とすれば、第1期のおわりに資本家が手にする P_w は $c' + v_1$ であり、 c' は労働対象の消費分と労働手段の消耗分の補填分であり、 v_1 は第2期の労働力購入にまわさねばならない分であるから、彼はインスタント・ラーメンさえ食べることはできないだろう。だから資本家は m の発生を利潤という呼び方で承認する。マルクス経済学では、 $v + m$ を価値生産物 (Wertprodukt) と呼ぶ。それは、それぞれの生産期に、生きた現実の労働がつくりだす新しい価値だという意味である。ブルジョア経済学はこれを「付加価値」と呼び

付加価値 = 売上高 - 原材料費、機械消耗費

と価格表現する。⁽²¹⁾

ところで「労働分配率」にもどろう。それは

$$\text{労働分配率} = \frac{\text{賃金}}{\text{付加価値}} \text{ である。}$$

この式は、労働者がつくりだした新価値のうちの労働者の取り分、という意味である。これが、賃金を価値生産物の分配と考えるブルジョア経済学の用語である。賃金はけっして労働成果 ($v + m$) の労働者への分配ではない。それは労働力商品の価格であり、労働力の価値によってきまる。労働成果はすべて労働者によって作られるが、そのすべては絶対に資本家に帰属する。その一部が労働者に分配されるとして、資本主義的搾取をおおいかくすのは、同時にその一部が無償で資本家に分配されることを正当化

するからにはほかならない。分配とは、対価を求めることなく物を人にくばり与えることである。もし私が、君のきげんをとるために、君に私のマンジュウの半分を与えるならそれは語の正確な意味で分配ではない。ましてもし君が私のあたえたマンジュウに対し、君のチョコレートをかえしてよこすなら、もちろんそのマンジュウは全然分配とは言えず、マンジュウとチョコレートの交換にすぎない。さきの表を見よう。 v_1 は $\cdots \rightarrow v_{02}$ である。これがけっして分配でないのは、 v_{02} への反対給付として労働者は第2期の労働力を提供するからである。資本家が v_1 を手離したのは、当然の労働者の取り分として差しあげたのではなく、第2期の労働力 v_{02} を買うためである。

ここでもうひとつ重要なことを言わなければならない。上表によると、資本家はまず生産要素として P_m と A を購入し、そして生産を行なう。労働力を購入したのなら、代金＝賃金は生産の前に支払ったのか？ 否である。商品は、消費を目的として購入する場合はだいたいにおいて、その使用価値が実現される前に代金を支払うのが通例である。しかし、労働力商品は、使用価値実現のあとで支払われる。これが賃金の後払いと言われるものである。賃金が、労働成果の生れたあとで支払われるということが、賃金を労働成果の分配として現象させる。上表で、 v_{01} は生産の前で、ではなく、生産（Ⅰ）が完了し、 P_w （Ⅰ）がつくり出された時点で支払われる。もし、 v_1 が v_{02} へと分配されるなら、資本家は生産の第1期終了時に二重に支払うことになる。幸いにも $v_1 \cdots \rightarrow v_{02}$ はここではなく、生産（Ⅱ）の終了のとき支払われる。 v_1 は、実は v_{01} の、つまり生産（Ⅰ）の労働力という費用の回収分である。しかし資本家は、払った分を回収するのではなく、後払い分を、まず回収してから払うのである。これは奇妙な表現であるから言い直そう。「これから払う分を確保してから、払うのである」。 v_1 がそのような回収分ではなく、労働者への分配分なら、第1期がおわって資本家のもとには $c' + m_1$ が残るだけである。彼は第2期のための労働力をどうして買うのか？ $m_1 > v_1$ なら彼はラーメンを食べることぐらいはできるだろうが、余りぜいたくはできないだろう。 m_1 から

第2期の v_{02} をひねり出さなければならず、次第に m は減少してついに消滅するだろうからである。 v_1 は v_{01} を回収しつつ v_{02} を買い、 v_2 は v_{02} を回収しつつ v_{03} を買う。この正常な運行が、賃金の後払いのためにわれわれの視界から消えて、 v_1 が v_{03} を買うのでなく第1期の賃金支払いに、つまり第1期の労働成果の労働者の取り分になるようにみえるのである。

労働分配率が、賃金/付加価値なら、資本分配率は、利潤/付加価値となる。労働分配率によって搾取がおおいかくされることを通じて、資本分配率によって搾取が正当化される。労働分配率は、生産過程における問題ではなく、生産過程で生産された価値生産物が分配されるという仮定の局面の問題であり、しかも、分子の賃金部分に、剰余価値から再分配された不生産的労働者の賃金までがふくまれるので、生産過程における搾取関係を不明瞭にする。したがって労働分配率は、生産過程における搾取度を正確に表現する剰余価値率と併せて用いるとき、はじめて、一定の意味をもった現象把握となる。

雑誌『経済』（新日本出版社）No. 113, 「日本経済の統計指標」 グラフ A に、1960年から1971年までの12年間の日本における剰余価値率と労働分配率が示されている。製造業のみの剰余価値率は最高1969年の318.9%から70年71年と急激に低下して246.8%となるが12年間を平均して300%前後であり、一方、この間の労働分配率は平均して37.6%である。剰余価値率300%は、もし一日の労働時間が8時間なら、必要労働時間2時間にたいする剰余労働時間6時間という大きさを示す。

ところで、上表を1つの企業または1つの生産部門と考えることは容易であるが、高度の分業体制にある現代社会の総生産と見ることは、かなりの無理と困難さを伴う。だからこれをより現実に近づけるためには、もうすこしシミュレートし、しかも、使用価値側面からも検討してみる必要がある。

マルクスは『資本論』第2巻、第3篇、第20章、第2節に、つぎの周知

の表式を与えた。

*以下、消費手段を K_m 、奢侈消費手段を L_m とする。

I Pm 生産部門 $4000c + 1000v + 1000m$

II Km 生産部門 $2000c + 500v + 500m$

同章、第4節では亜部門として L_m 部門をとりあげ、表式の第2部門のなかでの生活必需品と奢侈品の転換が論じられている。

この表式の中心点にあってもっとも見やすい $1000v$ をもとにして、そのなかに L_m 生産部門をふくませて、本節の最初の表をわれわれの表式につくりなおそう。われわれの表式が、マルクスのそれと相違するのはつぎの諸点である。

- 1 剰余価値率が100%から300%となる
- 2 両部門の有機的構成が4：1から8：1となる
- 3 資本家階級の消費だけにはいる奢侈品⁽²²⁾を労働者階級まで拵げ、労働者は収入の $\frac{1}{5}$ を生活資料に $\frac{1}{5}$ を奢侈品に支出する

われわれの表式はつぎのようになる。

I	Pm 部門	$8000c$	+	$800v. Km$	+	$1800m. Km$	
				$200v. Lm$		$1200m. Lm$	
II	{	Km 部門	$2600c$	+	$260v. Km$	+	$585m. Km$
					$65v. Lm$	+	$390m. Lm$
$\downarrow \uparrow$							
		Lm 部門	$1400c$	+	$140v. Km$	+	$315m. Km$
					$35v. Lm$	+	$210m. Lm$

*表式中の数字はマルクスのそれと同様に、価値の単位である。

* $v. Km$ や $m. Lm$ とは Km または Lm に転換されるべき v または m の意味だが、もし、 $v. Km$ が Km 部門なら、そのままそこで Km として消費される v という意味になる。

*最初の表では不変資本分の消費・消耗を考慮にいたしたが、表式では捨象される。

この表式は、もし L_m 部門を第Ⅱ部門に吸収すれば、つぎのような簡明な表式にすぎない。

$$\text{I} \quad 8000c + 1000v + 3000m = 12000$$

$$\text{II} \quad 4000c + 500v + 1500m = 6000$$

第Ⅰ部門の12,000の価値ある生産物はすべて生産手段であり、第Ⅱ部門の6,000の価値ある生産物はすべて消費手段である。第Ⅱ部門中に L_m 部門を考慮すれば、6,000は、3,900の価値ある生活必需品としての消費手段と、2,100の価値ある奢侈消費手段に分れる。

I, II 部門間の使用価値の転換は、一重と二重のワックで、第Ⅱ部門内での K_m と L_m の転換は— の部分で示され、この社会のすべての生産物の使用価値的転換をおえて、単純再生産がとどこおりなく進行する。

われわれの表式で、労働者は、労働者用の1,200の価値ある生活資料と300の奢侈品をえ、資本家は、資本家用の2,700の消費手段と1,800の奢侈品をえる。価値の合計で示せば、労働者は1,500、資本家は4,500である。

「さて、さて」と、日本の人口の90%におよぶ中流階級の一人が叫ぶ。「生産物を労働者用と資本家用に分けるなんて、不当だ」と。たしかに、おっしゃるとおりかもしれない、百貨店の中を歩いても、売場が、労働者用・資本家用と区切られているわけではないのだから。だが、まさにだからこそ、「巨大な商品集積」のなかに現代の剰余は限りなく拡散され、埋没するのである。労働者も、妻に豪華なミンクのコートを買ってあげることは自由であり、少し無理をして30年ぐらいの月賦で買えば確かに可能でもある。しかし賢明な労働者の妻は、イヴニングドレスの上にそれを羽織って、きらびやかな夜会に行く機会のないことを知っているし、たとい機会があったとしてもそのくだらなさをわきまえているから、きっぱりと夫の申し出をことわるだろう。労働者も、ときにはぜいたくな食卓を囲むことができるし、実際そうする。しかし翌日は、そして当分の間はけっしてそんな食事はしない。逆に、ブルジョアの娘さんが、すり切れたジーンズをはくことは、現にいくらでもあろう。だが、そうすることによって、同

じようなジーンズをはく労働者の娘さんしか味わえない愉快な青春を謳歌できたとしても、それはそれで結構なことながら、だからといって彼女がブルジョアの娘さんでなくなるわけではない。前者を労働者の一点豪華主義と呼ぶなら、後者はブルジョアの一点簡素主義にすぎない。だから、ある期間を平均的に眺めてみれば、結局、この生産物分類は正当となるのである。

さて、60年代から1975年までの日本の労働力人口を、その間の国勢調査をもとにして通観してみると、その階級構成は、30%前後⁽²⁴⁾の自営業者とその他若干の階層をのぞけば、労働者階級約3,500万人、資本家階級約200万人である。

われわれの表式がその間の日本の生産をあらわすとすれば、そこに示される18,000単位の価値のある全生産物、とりわけ、6,000の価値生産物は、前述のように、すべて、3,500万人の労働者によって生産され、それはすべて、200万人の資本家の所有物となる。くりかえして言えば、労働者は一日に2時間の必要労働と6時間の剰余労働を行う。だから、3,500万人の労働者は、自分たち用の1,500の生産物のために一日7,000万時間を働き、200万人の資本家の4,500の彼ら用の生産物のために、一日2億1,000万時間を働いたことになる。

われわれの表式は単純再生産を前提とした。資本家は4,500の価値生産物＝剰余価値を表式のようにむざむざ消費しはしない、必ずそのある部分を次期の生産のための新たな資本として投下しなければならない。これが資本の集積であり、こうしてたえず拡大再生産が行なわれる。資本の蓄積はたんに集積のみではなく、他の資本の吸収・合併によってより急速に行なわれる。資本の集中がこれである。国内外の経済的不安定、不況、インフレーションそして弱小企業の倒産が続く60年代から70年代は、とりわけ資本の集中によって蓄積は加速的に進行したのである。これが日本の高度経済成長とその破綻の20年の歴史である。

他方では、この期間、激しい消費ブームのかけ声とともに、3,500万人の労働者の前に、物質的富は、1,500ではなくて手に入れようと思えば手

にはいる6,000の消費財商品として現われた。それだけではない。公共投資，社会資本の充実の名のもとに，国家は道路をつくり橋をかけ鉄道を整備して12,000の生産財の補充部分というよりは，むしろ基幹部分に所得を再配分する。これがつねに国民の富として現象し，いまでも現象しつづけている。

生産手段は，Pm, Km, Lm のいずれの部門の生産手段であれ，蓄積されたブルジョア的富であり，道路，交通，運輸の諸機関は，それらの重要な「脈管系統」にはかならない。本稿脱稿に符節を合わせるように，(11/VII/'79, 18:25) 東名高速道路 日本坂トンネル内で発生した大事故は，高速道路が，けっして，庶民の便利やドライブの楽しみのための道路ではなく，「産業道路」であることを，完膚なきまでに実証した。⁽²⁴⁾

それらは，37.6%の「分配」を受けた労働者にとって，「豊さ」の仮象にすぎない。

(20) この最初に投下される貨幣としての資本は，どこから手に入れるかという問題は，ここでは論じない。ただ，この問題を経済学の「原理論」から排除せよ，と言うのが宇野弘蔵氏である，ということだけしておく。

(21) 「付加価値」が価格表現されるメリットは，たとえば付加価値税や一般消費税の税源のように，全く価値の生じないところに付加「価値」が生じるところにある。

(22) K. Marx, *Das Kapital*, Bd. II, S.402. 全集, XXIV, 496 参照。

(23) 自営業者の比率は1960年を境にして労働階級の下位となり，1975年には労働力人口中30%弱に低下した。このことは中小零細企業の多い自営業のこの期間の激しい変転を物語っている。

(24) 1. 「運輸省情報管理部の調べでは，愛知県から東京へ向けて動く貨物は年間約285万トン，このうちトラックによる輸送量は約246万トン，東京から愛知県へ動く貨物は約178万トンで，うち約162万トンがトラック。全体の88%がトラック輸送されていることになる。……」 (『朝日新聞』, 13/VII/'79, 朝刊)

2. 同紙は，「物流は重症」と題して，同事故の，生産ライン，運送その他への大きな影響を報じている(同上)

3. 「現在は……各種の石油関連品がはんらんし，ガソリンなどの燃料やエーテル，トルエンなどが日本国中を輸送され……道路公団によると，東名高速では一日にタンクローリー車が2000～3000台も通るといいます」

(『赤旗』, 13/VII/'79)

4. 「名神でも事故二ヶ所で11台」とし、「事故に関係したのはトラックばかり11台」と報じている。 (『朝日新聞』, 12/VII/'79, 夕刊)

5. 日本坂トンネル事故の主要原因車は5台であるが, 第一, 第三, 第四原因車は大型トラック, 第五原因車は普通トラックであり, 第二原因車のみが乗用車である。(第一~第五は, たんに事故車の前方よりの順位を示す)

むすびにかえて

先夜, ある楽しい席で, 突然「豊さとは何か」と問いかけられた。当時本稿をほとんど書きおえていたが, その偶然の問いは, もっと痛切にそれに答えなければならない義務感をおこさせた。第5節までの, いわば富の本質論が, いかにも現代の富, 現代の豊さにかかわり得, また, かかわりうることによって確かめられるかを, 最後の節にのべたつもりである。が, 拙稿があな問いに答えうるかどうか甚だ心もとない。

あのような問いが楽しい席でもフト投げかけられるということは, われわれの社会はほんとうに豊かなのか, そして, かつて M. ウェーバは知性と合理性の旗をかかげてドイツ新興ブルジョアジーの理論を代弁したのだが, 今日われわれのこのブルジョア社会は, そのような知性や合理性にさえつらぬかれているのだろうか, といった自問を, 誰しもくりかえしながら, なんとなく生きているのではないか, という気がさせられるのである。